

旭川医科大学基金  
令和4年度  
活動報告書

Asahikawa Medical University Fund Annual Report 2022 – 2023

## 学長ご挨拶



旭川医科大学  
学 長  
西川 祐司

いつも本学を暖かく見守っていただくとともに本学基金にご支援いただき、心から感謝申し上げます。昭和48年に設立された本学は今年の11月5日をもちまして、開学50周年を迎えました。11月4日に、文部科学省、自治体、医療機関、大学・学校関係など、各界を代表する多くのご来賓の方々にご臨席を賜り、開学50周年記念式典および祝賀会を無事開催しましたことをご報告いたします。また、記念基金に多大なご寄付をいただき、ありがとうございました。

記念式典では、私からの式辞、ご来賓のご挨拶の後、古川理事、東病院長、牧野学長補佐、升田看護学科長、および川辺副学長が本学における医療・教育・研究活動について発表しました。その後、自治医科大学学長の永井良三先生に「日本における近代医学の受容と大学病院の苦闘」のタイトルで特別講演をしていただきました。先生はギリシャ時代から現代に至る深い歴史的、哲学的、政治学的考察により、現在の日本の医学教育、大学病院の抱える問題点を明らかにされ、今後私達が進むべき方向に関して大きな示唆を与えてくださいました。

本学はコロナ禍に伴う危機をようやく乗り越えたところですが、地域の多くの皆様に本学の50周年を温かく祝福していただいたことを本当にありがたく感じております。今後も私達は本学の「原点」を常に意識しつつ、皆様方のご期待に応え、皆様に誇りをもっていただけるような医科大学を目指し、教職員全員で努力していくこととお誓い申し上げます。

## 実績報告

### 令和4年度 実績報告

#### 令和4年度収入

寄附受入総額	161件	21,051,000円
前年度からの繰り越し		77,111,925円
利息		809円
その他（過年度返納分）		20,377円
合計（A）		98,184,111円

#### 令和4年度支出

支援事業		
●研究活動助成事業	21件	1,820,536円
●地域医療支援事業	1件	2,287,450円
●卒業生に対する奨学資金貸与事業	4件	4,800,000円
弓道場の改修	1件	200,000円
解剖学授業の実用品代		1,016,490円
看護学科開設30周年記念事業		546円
事務費		1,546,660円
合計（B）		11,671,682円

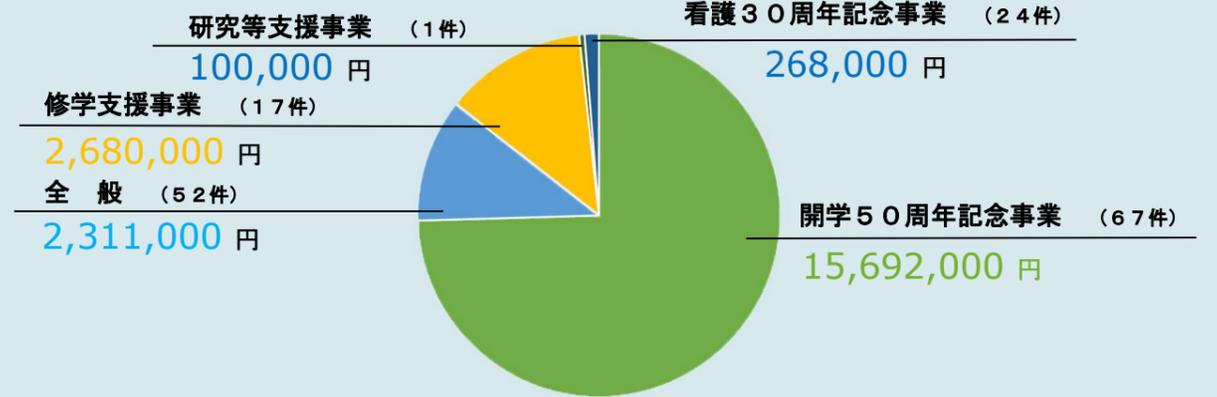
年度末 基金残高（A-B）・・・86,512,429円

## 実績報告

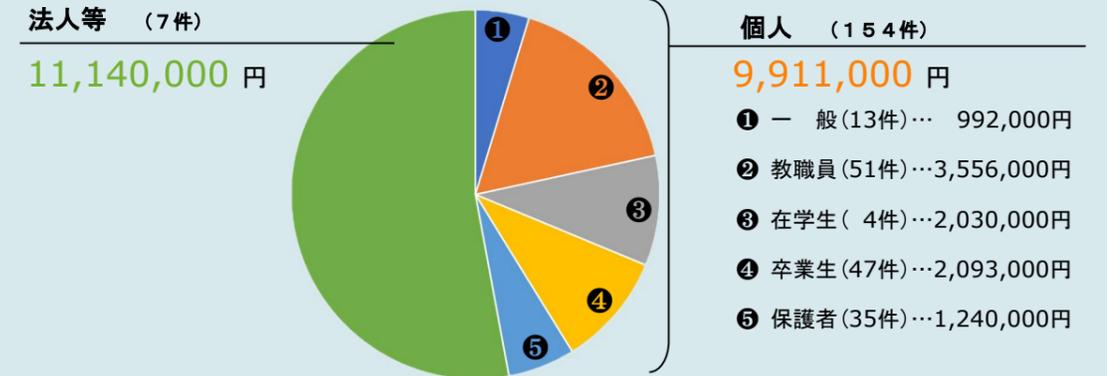
### 令和4年度 実績報告

#### 令和4年度旭川医科大学基金への寄附内訳

##### <寄附目的別>



##### <寄附者属性別>

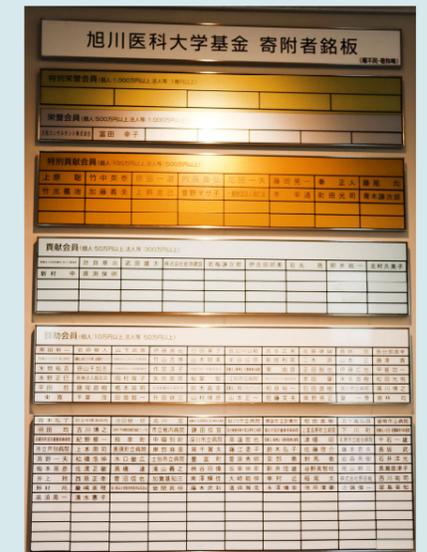


#### 称号件数

旭川医科大学基金創設以降にお贈りした会員の称号件数（累計）は以下のとおりです。

称号区分	寄附金額		個人	法人等
	個人	法人等		
特別栄誉会員	1,000万円以上	1億円以上	0	0
栄誉会員	500万円以上	1,000万円以上	1	1
特別貢献会員	100万円以上	500万円以上	19	1
貢献会員	50万円以上	300万円以上	12	2
賛助会員	10万円以上	50万円以上	128	38

（令和5年3月末現在）



会員の称号をお贈りした寄附者様のお名前を掲示した銘板を旭川医科大学病院レストラン「ななかまど」前の廊下に設置しています。なお、開学50周年記念基金へご寄附いただき、会員の称号をお贈りした寄附者様のお名前は開学50周年記念事業にて改修後の学生食堂付近の銘板に掲示させていただきます。

## 令和4年度 支援事業報告

皆様からの温かいご支援は、研究や学生支援など、様々な活動に活用させていただいております。

## 地域医療支援事業



外国人患者・家族など多様な社会的・文化的背景を有する対象者に対応できる看護職育成に関する研修プログラムの検討

医学部看護学科長/看護職キャリア支援センター・教育プログラム開発部門長 升田 由美子

この度は「旭川医科大学基金支援事業」によるご支援を賜り、誠にありがとうございました。予定していた事業年度を終了するにあたり、以下のようにご報告いたします。

## 【事業内容】

- 「外国人患者と家族への対応の現状と課題」に関する調査
- 国際化に対応できる看護職育成に関する研修会開催
  - 1、2に関する調査費用、学会発表にかかる費用、報告書作成・郵送、講演会講師謝金等について基金を適切に用い実施した。

## 【成果】

- 「外国人患者と家族への対応の現状と課題」に関する調査
  - 1) 北海道A市内5基幹病院の看護部長5名、看護部長から推薦された2018年度以降外国人患者対応経験のある看護職員計372名を対象に無記名自記式質問紙を用いた郵送法により調査を実施した。実施期間は2021年12月1日～2022年3月31日であった。調査は、旭川医科大学倫理委員会の承認を受けて実施した（承認番号：21106）。138名から返信があり（回答率37.1%）、これらを分析対象とした。結果の詳細は後述する報告書に記載するものとする。
  - 2) 2022年11月3日開催の第7回国際臨床医学会学術集会において（於：札幌・北海道大学学術交流会館）において、調査結果を「A市内の基幹病院における外国人患者と家族への看護実践上の困難」として発表した。当初、一般演題として登録したのだが、その内容の有用性より学会からの要請を受け、一般発表からNiNA（日本国際看護師）シンポジウムのシンポジストとしての発表となり、その後シンポジストとしても登壇した。シンポジウムでは旭川医科大学看護職キャリア支援センターでの外国人対応能力向上に向けた取り組みについて発言する機会を得た。
  - 3) 調査結果を「A市内の基幹病院における外国人患者と家族への看護実践上の困難に関する調査報告書」（全13ページ）としてまとめ、冊子とした。報告書は調査協力をいただいた5基幹病院の看護部・病棟、また旭川市や北海道などの自治体、北海道新聞等に配布した。

## 2. 国際化に対応できる看護職育成に関する研修会開催

- 1) 国際化に対応できる看護職育成の一環として「外国人患者対応能力向上に向けた講演会」を企画・運営した。
  - ① 令和3年度第2回講演会「後発開発途上国で生きる人々への医療活動（2022年3月1日）」  
旭川医科大学看護学講座助教（当時）杉山結理先生を講師とし、会場・zoomのハイブリッド形式で開催した。会場11名、zoom39名の参加者があり、事前質問があるなど関心の高さが伺えた。
  - ② 令和4年度第1回講演会「外国人留学生の医療支援を通して」（2022年12月1日）  
東川町文化交流課、東川町立東川日本語学校・学校推進室マネージャー（JICA派遣）である高野悠己氏を講師に迎え、会場・zoomのハイブリッド形式で開催した。会場20名、zoom50名と多くの参加者があった。

## ③ 令和4年度第1回講演会「医療で用いるやさしい日本語」（2023年2月20日）

順天堂大学大学院医学研究科医学教育学教授 武田裕子氏を講師に迎え、zoomによるオンライン形式の研修会を実施した。旭川医科大学職員だけではなく、学生や地域の看護職の参加もあり、外国人模擬患者に協力を得て行ったロールプレイ形式のミニワークも好評であった。参加者は約30名であった。

また、第2回講演会に先立ち、講師、外国人模擬患者と講演会に関する事前打合せをzoomで行い、効果的な講演会とすることができた。

## 【今後の展望】

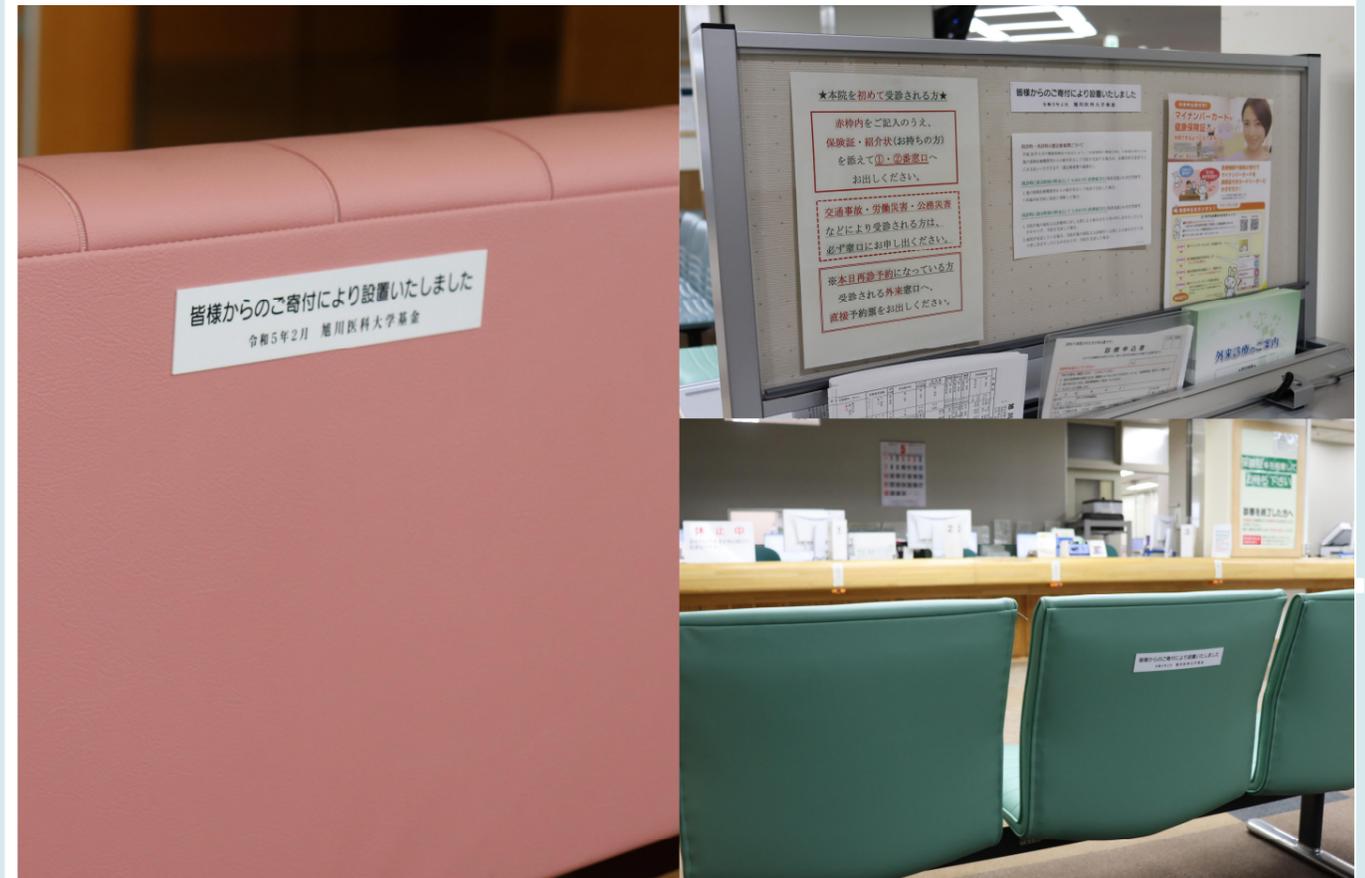
調査結果や講演会参加者のアンケートを踏まえ、今後も研修を実施する。具体的には青年海外協力隊を経験した講師による講演と、「医療×やさしい日本語」をベースとした講義+ワークショップ形式の研修会を実施することとしている。研修会では本基金で購入したポータブル翻訳機「ポケットーク」を用いて実際の場面をロールプレイする研修を予定している。

## 地域医療支援事業



地域医療支援事業として、病院設備の充実を図るため新しく記載台と待合イスを設置いたしました。記載台は受付カウンター1番窓口前、待合イスは料金計算窓口前と各科外来に設置しています。

今後も皆様からお寄せいただいたご寄附を病院設備の充実に活用させていただきます。



## 研究活動助成事業

令和4年度から実施を開始した「基盤的科学研究の自立化支援助成」へ研究活動助成事業として助成金の一部を負担しました。「基盤的科学研究の自立化支援助成」は、本学教職員を対象に基盤的研究分野への研究助成を行い、自立した研究活動にむけた、科学研究費助成事業等の外部資金獲得へつなげることを目的とした制度となります。

令和4年度は21名の採択があり、成果報告書が提出されました。その一部をご紹介します。



### 成体延髄神経幹細胞ニッチに着目した摂食抑制メカニズムの解明

解剖学講座機能形態学分野 助教 古部 瑛莉子

#### 【研究成果の概要】

##### 研究の目的

そこで本研究では、血液脳関門が存在しない特殊な部位であるAPに存在する神経幹細胞の摂食に対する機能的な役割を明らかにすることを目指した。飽食の時代に突入した現在、肥満や糖尿病などの摂食に起因した生活習慣病の罹患者は増え続け、大きな問題となっている。しかし認可されている摂食を制御する薬剤は1種類にとどまり使用ハードルも高いため、治療や予防方法は極めて少ない。脳室周囲器官のAPは血液脳関門のない特徴的な脳領域であることが知られている。AP神経幹細胞による摂食制御機構が判明すれば、社会的に大きな問題である生活習慣病に対する血液脳関門を考慮しない薬剤の開発に繋がることも期待される。

##### 研究の方法

###### 動物

離乳後の7週齢の雄C57BL/6Jマウスを株式会社クレアジャパン（東京都目黒区）より入手し、7日間馴化させた。実験用マウスをグループ（各グループ4匹）に割り振り、個別のプラスチックケージで飼育した。動物は湿度および温度（22±2℃）を制御した部屋で、12時間：12時間の明暗サイクルで維持し、水および餌を自由摂取させた。8週齢でマウスを対照食、高脂肪食（脂肪からのカロリー60%：Test Diet 58Y1）、および対照食+50w/v%スクロース群に分けた。マウスは1週間または4週間飼育された。1週間（4週間の実験では最後の1週間）マウスに1日1回、200mg/kgのBrdU（Sigma-Aldrich）を7日間、i.p.注射した。

##### 免疫組織化学

マウス（実験群あたりn = 4匹）を三種混合麻酔（0.3 mg/kgメトミジン、4.0 mg/kgミダゾラム、5.0 mg/kgブトルファンールで深く麻酔し、リン酸緩衝生理食塩水（PBS）で経心灌流し、4%パラホルムアルデヒド（PFA）で固定し脳を取り出した。24時間後固定の後、凍結した。その後クライオスタットにより20μm厚の切片を作製した。免疫組織化学には、ウサギポリクローナル抗Olig2抗体（希釈度1：500；Millipore, Billerica, MA, USA）、マウス抗Math1抗体（Clone Atoh1；希釈度1：20；Developmental Studies Hybridoma Bank, University of Iowa, USA）、鶏ポリクローナル抗Vimentin抗体（希釈1：12000；Millipore, Temecula, CA）を用いた。二次抗体として、Alexa-488およびAlexa-594-conjugated二次抗体（希釈度1：400；Jackson ImmunoResearch, West Grove, PA, USA）を使用した。その後、切片を共焦点レーザー走査型顕微鏡（Olympus）で撮像した。

##### 統計解析

マウス脳アトラスに従って、他の脳領域から1動物あたり8切片を解析した。定量解析を行うため、共焦点画像は同じピンホールサイズ（光学スライス厚4μm）、明るさ、コントラストの設定で取得した。共焦点顕微鏡（FV1000-D, Olympus, Tokyo, Japan）を用いて、画像（1,024 × 1,024 pixels）をTIFファイルとして保存し、Vimentin+BrdU+細胞またはOlig2+BrdU+細胞の密度はWinRoofを用いて評価した。データは、平均値±SEMで表した。統計的な差は、Tukey's testを含むANOVAまたはunpaired Student's t testにより、P<0.05の有意水準で評価された。

#### 研究成果

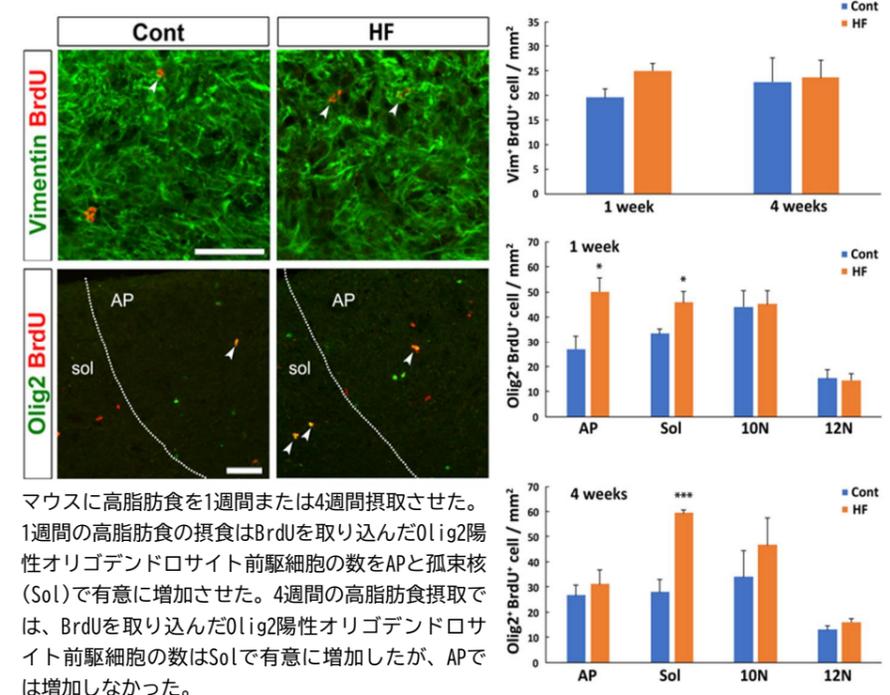
① 高脂肪食摂取を短期間（1週間）及び長期間（4週間）行った群ともにVimentin陽性神経幹細胞の増殖には変化は見られなかった。一方で、Olig2陽性オリゴ前駆細胞の増殖は短期間でもAPおよび孤束核(Sol)で促進されていることが判明した。APでのOlig2陽性オリゴ前駆細胞の増殖は高脂肪食を長期間続けた群では見られなくなっていたが、Solでは長期間継続させても増殖は促進されていた。分化について検討を行ったところ多くのBrdU陽性細胞は成熟オリゴデンドロサイトマーカーAPCおよびCNPase陰性であり、未分化オリゴデンドロサイトマーカーのPDGFRα陽性であることが判明した。

② 50%スクロース飲水を短期間（1週間）行った場合、コントロール群と比較してVimentin陽性神経幹細胞およびOlig2陽性オリゴ前駆細胞の増殖に変化は見られなかった一方で、スクロース飲水を長期（4週間）続けた群ではAPのVimentin陽性神経幹細胞およびOlig2陽性オリゴ前駆細胞の増殖が促進されていた。

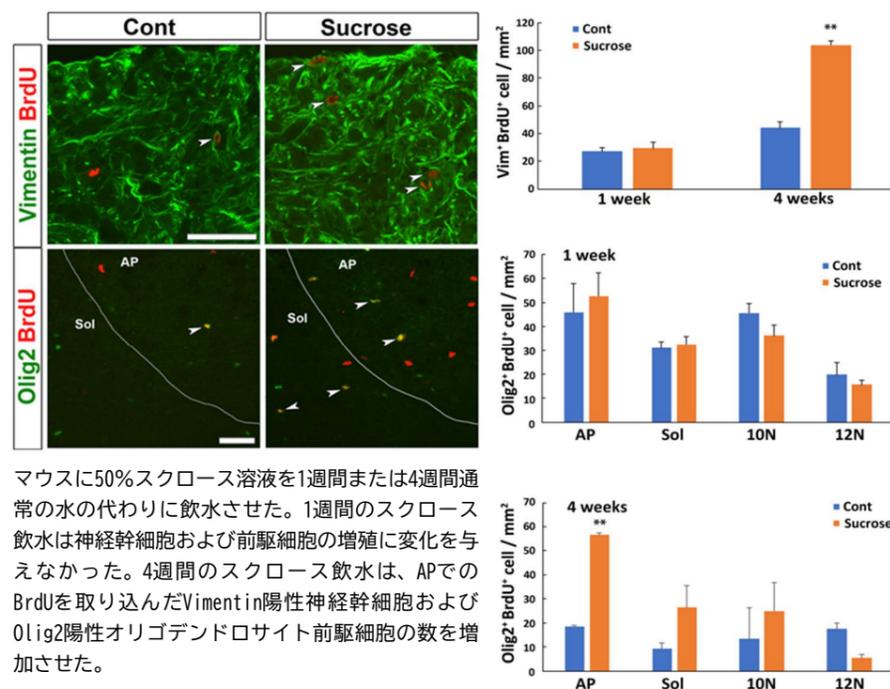
③ 摂食抑制ホルモンとして知られるコレシストキニンの末梢投与を行いAPでの神経新生の有無を検討したところ、BrdUを取り込んだMath1陽性細胞が有意に増加することが判明した。このとき、神経幹細胞およびオリゴ前駆細胞の増殖に変化は見られなかった。

現在、上記によって同定した条件で、これらの新生細胞により影響を受ける神経回路や、摂食行動に実際にどのような変化を及ぼすのかの検討を行っている。

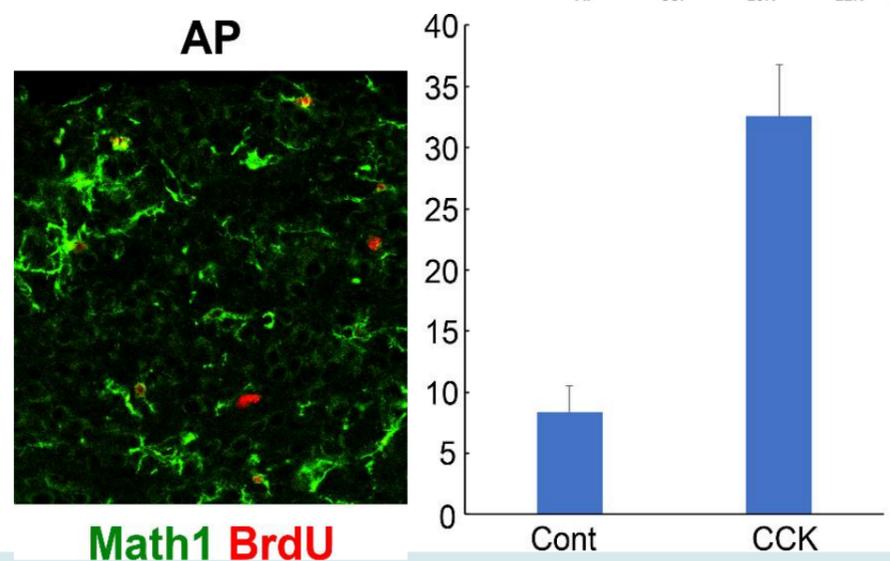
マウスに0.53mg/kgのコレシストキニンを1週間腹腔内投与した。APでのBrdUを取り込んだMath1陽性神経前駆細胞数はコレシストキニン投与群で有意に増加した。



マウスに高脂肪食を1週間または4週間摂取させた。1週間の高脂肪食の摂食はBrdUを取り込んだOlig2陽性オリゴデンドロサイト前駆細胞の数をAPと孤束核(Sol)で有意に増加させた。4週間の高脂肪食摂取では、BrdUを取り込んだOlig2陽性オリゴデンドロサイト前駆細胞の数はSolで有意に増加したが、APでは増加しなかった。



マウスに50%スクロース溶液を1週間または4週間通常の水の代わりに飲水させた。1週間のスクロース飲水は神経幹細胞および前駆細胞の増殖に変化を与えなかった。4週間のスクロース飲水は、APでのBrdUを取り込んだVimentin陽性神経幹細胞およびOlig2陽性オリゴデンドロサイト前駆細胞の数を増加させた。





【研究成果の概要】

1. 背景：炎症性腸疾患(IBD)は、腸管および全身に腸管外合併症を引き起こし、QOL低下や死亡要因となるが、発症機序は不明な点が多い。我々は、IBD合併VTEの実態について調査報告し(Ando K, et al. J Gastroenterol. 2021)、病態解明の重要性を示した。近年、micro RNA(miRNA)、circular RNA(circRNA)といったnon-coding RNAは、転写・転写後調節を通じて様々な疾患病態に関与することが明らかとされた。circRNAは逆方向のsplicingによって形成される環状1本鎖RNAであり、miRNAと相補的配列を有し、miRNAスポンジと呼ばれるmiRNAの機能阻害作用を有し(Memczak S, et al. Nature. 2013)、RNA結合蛋白(RBP)との結合を介した調節作用も報告されている。また、当教室では、大腸癌や炎症性腸疾患におけるRBPの機能解析を行ってきた(Konishi H, et al. Cancers. 2021) (Ando K, et al. Inflamm Bowel Dis. 2015)。しかし、IBDにおけるcircRNAの発現を解析した研究は少数例あるものの、IBDにおけるcircRNAの関与はほとんど明らかにされていない。

2. 本研究の目的：IBDにおける特定のcircRNAの発現変化と機能解析、circRNAとRBP・miRNA・mRNA間相互作用からIBDの病態を解明した研究はない。上記の学術的背景から、本研究では、circRNAの発現変化・機能解析を行い、IBDにおける腸管および腸管外炎症の発生・進展における、circRNAを中心としたRBP・miRNA・mRNA間の相互作用という、新たな側面からの病態解明および新規バイオマーカーや治療標的の同定を行うことを目的とする。

3. 研究の成果

1) 健常者とクローン病腸管粘膜でのcircRNA発現の網羅的解析

非クローン病健常者由来腸管粘膜(n=4)を対照として、IBDの代表的疾患であるクローン病(CD)患者由来腸管粘膜(n=4)のcircRNA発現を、circRNA sequencelにより網羅的解析を行った。その結果、31のcircRNAの有意な発現変化を認め、そのうち発現亢進は5個、発現低下は26個であった(図1)。

2) RT-PCRによるCD腸管粘膜におけるcircRNA発現変化の確認

上記1)において有意な発現変化のあったcircRNAに対するprimerを設計し、CD腸管粘膜(n=45)・非CD腸管粘膜(n=15)を用いて、circRNAの発現変化をRT-PCR法を用いて検討した。非CD群に比べ、CD群においてHsa\_circ\_0015388が有意に発現亢進していることが示された(図2)。

この結果より、Hsa\_circ\_0015388に着目して機能解析を行うこととした。

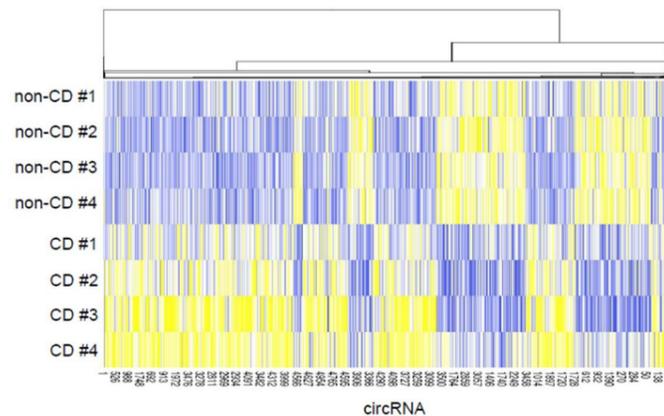


図1. 健常者とクローン病(CD)腸管粘膜の比較では31個のcircRNAの発現変化を認めた。

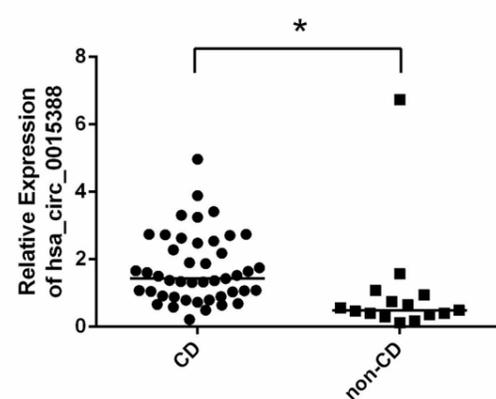


図2. 健常者とクローン病(CD)腸管粘膜におけるHsa\_circ\_0015388発現変化(RT-PCR)

3) 腸管粘膜におけるHsa\_circ\_0015388発現とCDの表現型の相関

CDにおけるHsa\_circ\_0015388の役割を検討するため、まず腸管粘膜採取時のCDの臨床疾患背景(病型・現治療・治療歴、疾患活動性や血液中炎症マーカー)と腸管粘膜におけるHsa\_circ\_0015388発現変化の関連に関し解析した。アルブミン低値群においてHsa\_circ\_0015388の発現が有意に低下しており、血中炎症マーカー(C反応性蛋白; CRP・ロイシンリッチα2グリコプロテイン; LRG)や疾患活動性が高い群ではHsa\_circ\_0015388の発現が低い傾向にあった。病型や治療歴との関連は認めなかった。

4) 培養細胞を用いたHsa\_circ\_0015388の機能解析

上記検討では腸管(小腸)粘膜を用いており、粘膜内には主に腸管上皮・免疫担当細胞が含まれていることから、実際にHsa\_circ\_0015388の発現が亢進している細胞群を同定するため、大腸腸管上皮培養細胞CaCO2 bbe・HCEC-1CTおよび、THP-1誘導マクロファージ細胞株を用いてin vitroによる検討を行った。その結果、THP-1誘導マクロファージにおいてのみHsa\_circ\_0015388が発現しており、腸管上皮培養細胞では発現していないことが明らかとなった(図3a)。CD由来腸管粘膜における免疫染色により粘膜固有層にCD68陽性のマクロファージが集積していることを確認していることから、CD腸管においてもマクロファージにおいてHsa\_circ\_0015388が発現亢進していることが示唆された。

続いて、マクロファージにおけるHsa\_circ\_0015388が果たす機能を解析するため、THP-1誘導マクロファージ細胞株にHsa\_circ\_0015388 siRNAを導入し、各種サイトカインおよびreactive oxygen species (ROS)の発現解析をRT-PCRおよびROS assayを用いて行った。その結果、Hsa\_circ\_0015388 siRNA群ではscramble RNA投与群に比べて、ROS発現が有意に亢進していることが明らかとなった(図3b)。

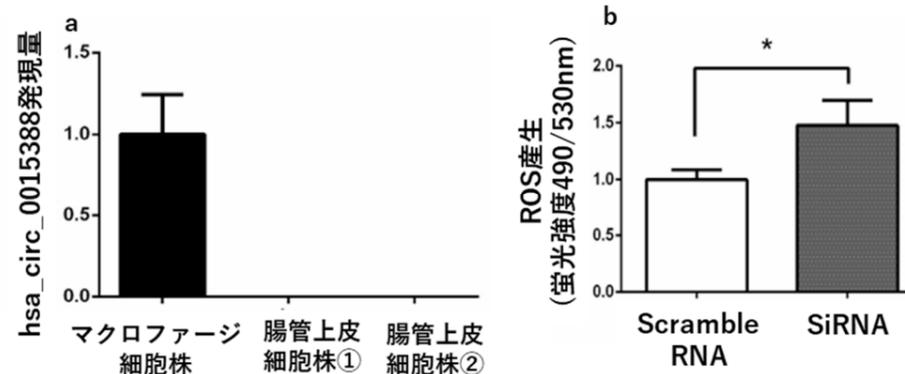


図3.(a)circ\_0015388はTHP-1誘導マクロファージ細胞株に発現する。(b) has\_circ\_0015388のSiRNAによる発現抑制によりROS産生が亢進する

4. 本研究結果のまとめ

CD腸管粘膜ではcircRNAであるHsa\_circ\_0015388の発現が亢進していた。アルブミン低値例において有意な発現低下を認めた。培養細胞における検討において、Hsa\_circ\_0015388は腸管上皮培養細胞では発現を認めず、THP-1誘導マクロファージにおいては発現していた。加えて、Hsa\_circ\_0015388 knockdownにより、THP-1誘導マクロファージにおけるROS産生が有意に上昇することを明らかにした。

以上より、Hsa\_circ\_0015388はマクロファージにおけるROS産生制御を介してCDの腸管炎症の制御に寄与する可能性が示唆された。

5. 結果の公表および今後の課題

- 1) 本研究結果に関して論文作成・投稿中である。
2) 本研究結果を基盤として、2024年度 科学研究費 基盤研究Cへ申請を行った。
3) 今後の研究遂行課題

Hsa\_circ\_0015388のターゲットとなるmicroRNAやその発現や機能を制御するRBPの同定・機能解析に関して検討を進める。加えて、in vivoモデルにおけるHsa\_circ\_0015388やその標的となるmiRNAや結合するRBPの機能解析を進める。また、CDだけでなく、もう一つのIBD代表疾患である潰瘍性大腸炎(UC)においても同様の検討を進めるとともに、Hsa\_circ\_0015388以外のcircRNAについても検討を進めていく予定である。



## 現代の日本社会における異種移植の社会的認識の把握

一般教育 社会学 講師 工藤 直志

2022年11月、「基盤的科学研究の自立化支援助成」に採択され、「現代の日本社会における異種移植の社会的認識の把握」という研究課題に取り組んでいる。この研究の目的は、種を超えた臓器の移植である「異種移植」を、一般の人たちがどのように認識しているのかを幅広い視点から把握することである。

2022年1月、アメリカ合衆国で末期心不全の患者に遺伝子組換えブタの心臓を移植したという発表があった。世界各国で移植のための臓器が不足していることもあり、臓器不足の問題を解決する新しい治療法になりうるとして、ブタの臓器を用いた異種移植への期待が高まっている。しかし、異種移植の技術的・医療的問題が克服されたとしても、新しい医療技術が社会的に受容されるとは限らない。また、治療のためにブタを利用することの是非を社会的に議論しておかなければならないであろう。

新しい医療技術の社会的な受容を検討したり社会的な議論を行ったりするためには、異種移植についての基礎的情報が必要となることを念頭に置き、本研究では、異種移植への態度（賛成や反対）や異種移植の懸念への意識など、異種移植の社会的認識を社会調査の手法を用いて明らかにすることを試みた。現代日本の社会的認識をできるだけ適切に把握するために、住民基本台帳にもとづいて性別（2区分）と年齢階級（5区分）の10層に3,000人を割り当てて、ウェブ法による調査（インターネットのウェブサイトを利用する調査）を2023年3月に実施した（最終的に3,113人から回答を得た）。

今回の調査では、異種移植への態度を把握するために、人間ではない動物（例えば、ブタ）の臓器を移植することは許されるべきだという趣旨の設問への回答を求めた。この設問への回答をみると、肯定的態度（「たいへんそう思う」と「そう思う」）が32.0%、否定的態度（「そう思わない」と「まったくそう思わない」）が17.6%、中間的態度（「どちらともいえない」）が44.7%となった（図1）。調査時は異種移植がまだよく知られていないことが多くの人たちが中間的態度を示した要因といえるかもしれない。

回答者の属性が異種移植への態度に及ぼす影響を分析すると、男性よりも女性のほうが異種移植に抵抗感をもつ傾向があることがわかった。また、教育年数が長いと異種移植に肯定的態度をもつ傾向も確認できた。性の違いや最後に卒業した学校の違いによって、異種移植という治療法や動物（ブタ）の臓器に対する理解の仕方が異なっていると推察される。

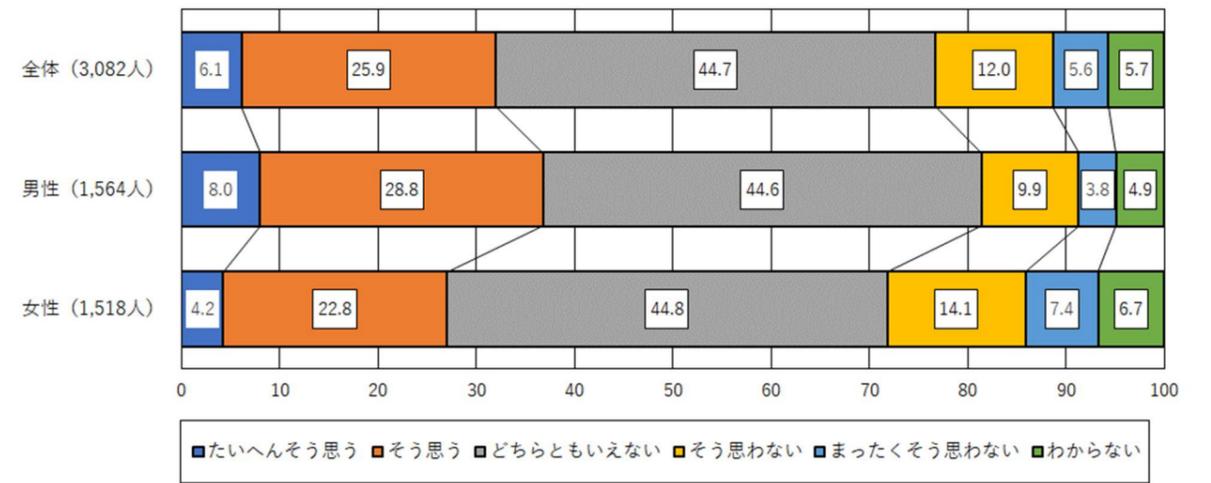
次に、臓器移植（ヒトの臓器をヒトの体内に埋め込む治療法）を受容する意識と異種移植への態度の関連を確認すると、臓器移植を受け入れている人ほど異種移植に肯定的態度をもつ傾向があることがわかった。ヒトと動物（ブタ）という種の違いがあるとしても、どちらに対しても同じような態度をもっていることになる。うまく機能していない臓器を新しい臓器を埋め込むことで治療するという類似性から、臓器移植と異種移植に同じような態度を示すと考えられる。

さらに、異種移植の懸念（①異種移植は不自然である、②動物の臓器の移植は人間性を毀損する、③異種移植は動物を道具として扱っている）への意識が異種移植への態度にどのように影響するのかを分析した。①異種移植は不自然であるという意識と②人間性を毀損しているという意識が強いほど、異種移植に否定的な態度となることがわかった。③動物の道具化を危惧する意識は異種移植への態度に影響を及ぼしていなかった。異種移植は不自然だという意識や動物の臓器を移植されると人間性が毀損されるという意識が異種移植への抵抗感と結びついていることが示唆される。

上記の分析結果は、2023年9月に開催された科学社会学会第12回年次大会で発表した内容の一部である。現在は、学会で発表した内容を論文として公表するための作業を進めている。また、高度な手法を用いたデータ分析や自由回答方式の質問で得たテキストデータの分析にも並行して取り組んでいる。

本研究の成果は、異種移植を一般の人たちがどのように認識しているのかという社会的認識を示すことである。さらに、本研究の成果は実用化の期待が高まっている異種移植について、専門家、ステイクホルダー、市民などが対話するために必須の基礎的情報を提供することにもなるだろう。

図1 異種移植への態度「動物の臓器を移植することは許されるべきだ」（%）



## オンラインを活用したアクションリサーチによる看看連携プログラムの開発

看護学講座 高齢者看護学領域 助教 牧野 志津

### 【研究概要】

高齢化が著しいわが国の政策である地域包括ケアシステムの構築において、医療と看護・介護のスムーズな移行を促す退院支援の充実が極めて重要です。看護職は、医療・生活支援を含む幅広い知識と専門性を有する職種であり、患者の急性期医療から日常生活へのスムーズな移行を導く中心的役割を担うことが期待されています。しかし、退院支援の場において、看護職間の連携は必ずしも十分ではないとの報告もあることから、大学病院看護師と訪問看護師の連携をモデルとして、急性期医療機関から日常生活に至るプロセスに関わる看護師—看護師連携（看看連携）の予備的調査を行いました。その結果、大学病院看護師は、退院支援に際し、急性期病院退院後の患者の療養生活のイメージの把握、在院日数の短縮・治療中心の医療など大学病院が果たすべき役割との両立、訪問看護師との連携の自発的促進に、困難を感じていることが明らかとなりました。この課題を解決するために、より良い状況への変化を目指すアクションリサーチを研究の基軸とし、質の高い退院支援を実現する看看連携プログラムを創出することを目的としました。

### 【研究成果（進捗）】

アクションリサーチは、研究者もそのフィールドに参加し、対等な関係性の中でより良い方向に変わっていくことを前提に研究活動を行います。アクションリサーチの手法に基づいて、より良い連携を図る方法を模索しました。具体的には、北海道内の訪問看護事業所6か所（留萌市・紋別市・小清水町・鹿追町・北広島市・旭川市）の管理者7名と大学病院地域連携室等の看護職7名でオンラインを用いて「より良い連携のあり方」をテーマに「オンライン連携会議」を行いました。参加者を対象にした横断的調査では、会議の満足度は高く、オンライン会議は連携力に良い影響を与えた可能性が示唆されました。各会議の質的分析の結果からは、参加者の連携に関する認識の変化が見いだされ、連携促進のポイントが明らかになり、大学病院と地域の協働による退院支援の強化の有用性と必要性が示されました。現在、質的統合法（KJ法）を用いて連携に関する認識の変化の過程の分析を進めております。

### 【今後の展望】

本研究において、急性期病院の看護師と在宅医療に携わる看護師とで話し合いを重ねることで、より良い連携が可能となることが示唆されました。本研究成果をもとに、急性期病院で治療終了した人々が望む暮らしを叶えられるよう、訪問看護師との協働による看看連携プログラムの開発をしていきたいと考えております。

### 【寄附者様への謝辞】

この度は旭川医科大学基金へのご支援を賜り、誠にありがとうございます。本研究助成事業により、研究へのモチベーションはもちろんのこと、研究に必要な物品等の購入が可能となりました。心より感謝申し上げます。地域包括ケアシステムの構築はさらに深化・推進が必要になります。急性期病院から在宅療養へのスムーズな道筋が描けるように連携の強化に努めてまいります。

令和5年9月2日に旭川医科大学基金の寄附者の皆様をお招きした「感謝の集い」を大雪クリスタルホールにて開催しました。新型コロナウイルス感染症の影響により令和2年より開催できておりませんでしたが、感染状況の経過を踏まえ、規模を縮小して寄附者の皆様にお集まりいただくことができました。

西川学長のご挨拶から始まり、本間学長補佐から基金の実績をご報告、その後は本学教職員と寄附者の皆様にご歓談いただき、あっという間に予定の時間となりました。

短い時間でしたが、ご参加いただいた皆様ありがとうございました。

来年以降も開催形式を検討しながら、お集まりいただける機会を設けられたらと思います。

旭川医科大学開学50周年に続き、令和8年に旭川医科大学医学部看護学科が開設30周年を迎えます。開設25周年の令和3年から「旭川医科大学医学部看護学科開設30周年記念事業」を立ち上げ、これまでに多くの皆さまから温かいご支援を賜りましたこと、心より御礼を申し上げます。

開設30周年を迎えるにあたり、記念式典、シンポジウムの開催をはじめとした記念行事の計画を立てております。

皆様におかれましては、この趣旨をご賢察のうえ、引き続き温かいご支援を賜りますよう切にお願い申し上げます。



旭川医科大学は令和5年11月5日に開学50周年を迎えました。開学から今日まで多くの皆様に支えていただき、心より感謝申し上げます。

この記念すべき節目に、記念事業として学生食堂をはじめとする福利施設等のリニューアルを計画しており、昨年12月に「開学50周年記念基金」を開設しました。開設からこれまでに7,207万円（586件）のご寄附をいただいております。（令和5年11月15日時点）多くの皆様の温かいご支援に心より御礼申し上げます。

基金の期間は令和6年3月までを予定しております。引き続き、ご支援賜りますようお願い申し上げます。

詳細につきましては、下記Webサイトにてご確認ください。

旭川医科大学開学50周年記念サイト

<https://www.asahikawa-med.ac.jp/50th/>

こちらからも  
ご確認ください



## 旭川医科大学基金へのご寄附のお願い

旭川医科大学基金では、地域に根ざした医療、福祉の向上のため積極的に活動を展開するため幅広く支えていただくご支援をお願いしています。

皆様の温かいご支援・ご協力をよろしくお願いいたします。

### 【ご寄附の内容】

1. 基金全般へのご寄附
2. 修学支援事業へのご寄附
3. 研究等支援事業へのご寄附
4. その他

### 【基金へのお申込み方法】

1. クレジットカード、コンビニエンスストアでの払込
2. 郵便振替払込
3. 銀行振込
4. 大学窓口への直接払込



詳しくは旭川医科大学Webサイトを  
ご確認ください





旭川医科大学総務課広報基金係

〒078-8510

北海道旭川市緑が丘東2条1丁目1番1号

電話：0166-68-2118

メール：[kikin@asahikawa-med.ac.jp](mailto:kikin@asahikawa-med.ac.jp)